

熱田神宮 宝物館だより

熱田神宮宝物館

編集 内田雅之

〒456-8585
名古屋市熱田区神宮一丁目1番1号
TEL (052)671-0852 FAX (052)671-1202
(年6回発行)

8月コーナー展 「熱田神宮の歴史と文化財Ⅱ」より



(裏面極印)

愛知県指定文化財 めいじてんのう ごほうべいおおばん 明治天皇御奉幣大判 縦 13.5cm 横 8.0cm 2枚 江戸時代

(1868) 明治元年9月27日、明治天皇は江戸行幸の途次、当神宮を親しく御参拝になられ、その折にお供料として献納になられた大判である。

これは江戸大判五種の一つ、(1860) 万延元年より流通した万延大判で、17,097枚製造されたうちの2枚である。共に表面に「金十兩後藤(花押)」と、後藤家17代典乗の墨書があり、上下左右に桐文を刻み、1枚はのし熨斗目、もう1枚はたね鑿目が打たれている。また、裏面にはそれぞれ桐文をはじめ3種の文様と、「吉」・「字」・「き」(1861) 3文字の極印が打たれている。尚、表面の文様と裏面の記号から、熨斗目のものは万延元年4月から文久元年7月まで、鑿目のものは同年7月以降に製造されたものあることが判る。

保存状態は極めて良く、表の墨書も鮮明で金錆もあらわれるなど、美術品としての価値が高い。

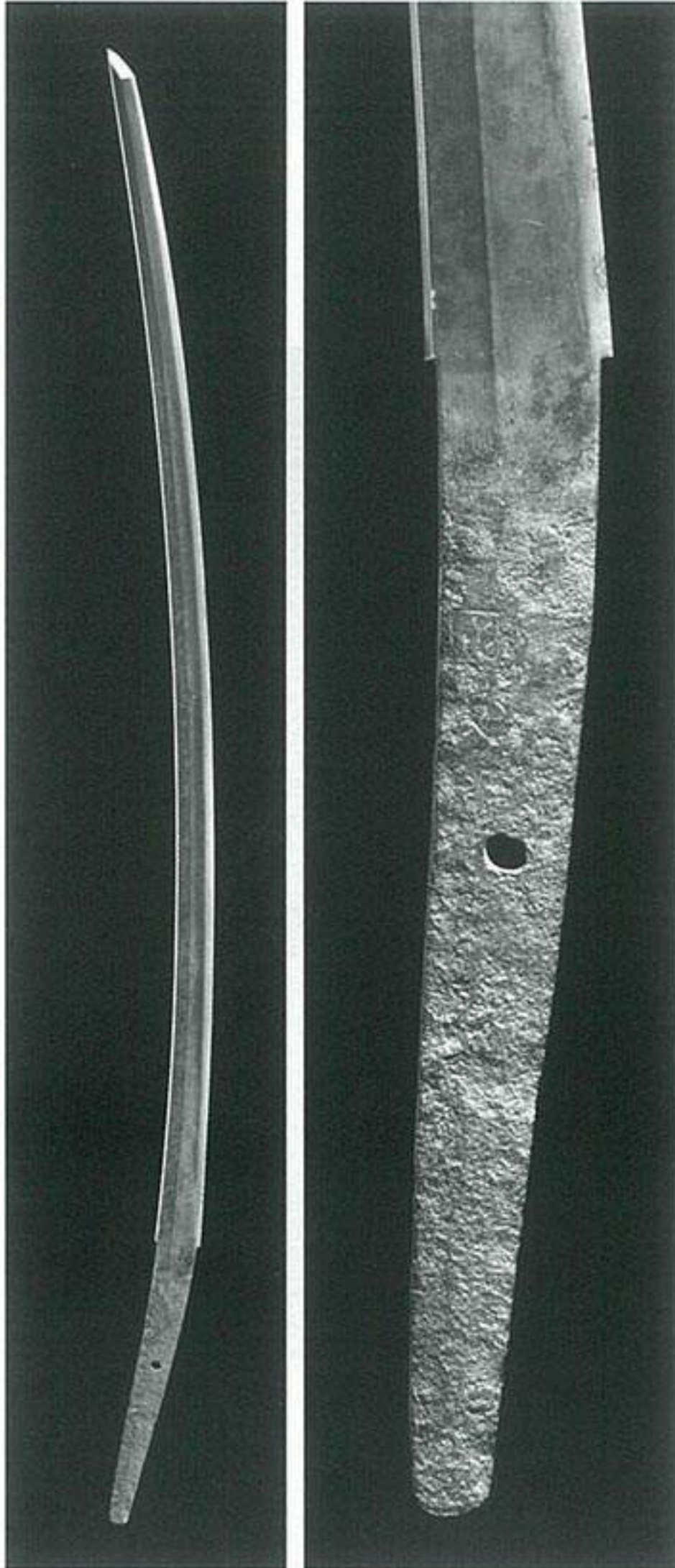
7月平常展 — 熱田神宮宝物展 —

6月29日(金)～7月24日(火)

(期間中無休)

※展示品は毎月入替いたします

コーナー展 — 熱田神宮の歴史と文化財 I — より



重要文化財 太刀銘国友 1口 鎌倉時代
 長 75.8cm 反り 2.2cm

鑄造、庵棟、小鋒で細身、腰反り高く、踏張りあり、先へ行き少しうつむく。小板目肌よく詰み、地沸つく地鉄に、刃文は直刃調の小乱れ、匂口うるみごころとなる。帽子乱れ込み、小丸ごころに焼詰める。茎は生ぶで反りをふせて細り、鐔目は筋違、先栗尻となる。

国友は粟田口派の刀工、6人兄弟の長兄で藤林と称し、後鳥羽上皇の御番鍛冶に召されたと伝え、在銘の确实なものは他に僅か一振を数えるのみである。刃中の匂口がうるむところは双方に共通しているので、国友の刃文はうるむのを特色とみてよいと思われる。資料価値は勿論ながら、優美で気品ある姿は、まさに古京物の名作といえよう。

なお、刀身鑄地に寄進銘があり、現状では磨滅して判読不能であるが、『熱田神宮図書』などによれば、「熱田太神宮奉納太刀 嘉吉元年十二月日 大宮司千秋民部少輔藤原朝臣季貞」と、刻されていたことが知られる。

その他の主な展示品 ◎重文 ○県文

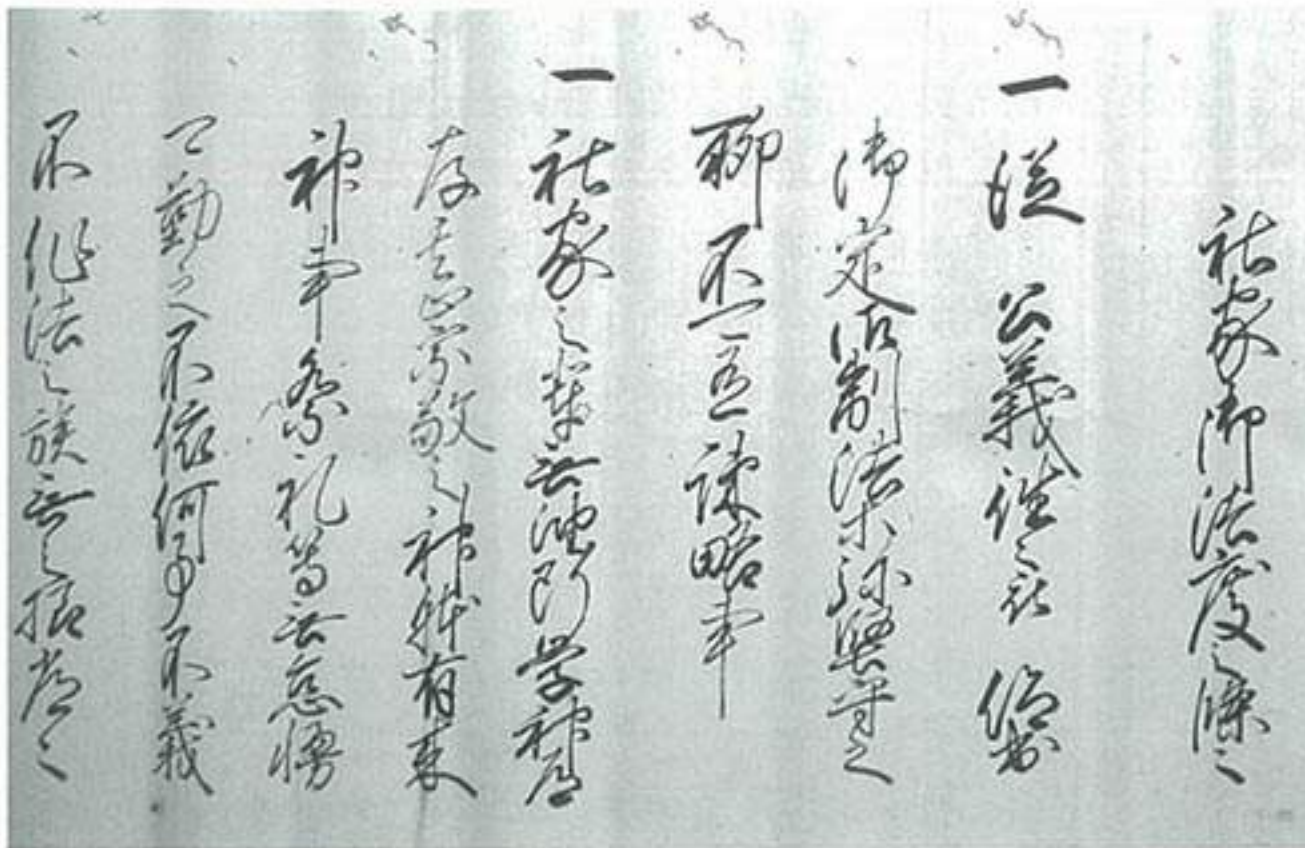
- 《書跡・古文書》 ◎日本書紀(卷第二・九・寄進状) ○紺紙金字般若心經 徳川家康判物写 他
- 《絵画》 年中行事片々(神宝風入) -石川英鳳筆- 七夕図 -森高雅筆- 鶴の図 -狩野梅斎筆- 他
- 《工芸》 ◎黒漆平胡籬 ◎朱漆弓 ◎入帷残闕 蓬莱鏡 松竹双鶴双桐鏡 亀甲地双鶴鏡 他
- 《刀剣》 ○太刀銘尾州犬山之住兼武 脇指銘長門守藤原氏雲 脇指銘伯耆守藤原信高 他
- 《コーナー展示 - 熱田神宮の歴史と文化財 I -》 ◎太刀銘備州長船兼光 ○太刀銘濃州関住兼房作 河村京三郎
- ◎太刀銘元弘三年六月一日実阿作 ○脇指銘長門守藤原氏雲 尾州舊渡之住 短刀銘備州長船利光 他 応永卅四年二月日

8月平常展 — 熱田神宮宝物展 —

7月27日(金)～8月28日(火)
(期間中無休)

※展示品は毎月入替いたします

コーナー展 — 熱田神宮の歴史と文化財Ⅱ — より



おわりはんしゃけはつと
尾張藩社家法度 紙本墨書 1通
縦32.2cm 長227.7cm 江戸時代

徳川継友が六代藩主となった4年後の享保2年9月、尾張藩より下された法度である。

幕府の法度を堅く守るべき事、以下七ヶ条を尾張藩が領国内の社家に対して『尾張藩宮條目』、『尾張藩社家申渡書』と共に下したもので、これらは三代藩主綱誠以降、原則として藩主の代替わりごとに下された。



めいじてんのうしゅうかくえいらんず
明治天皇收穫觀圖 1幅
森村宜稲筆 紙本著色 現代
縦67.0cm 横75.0cm

(1868)
明治元年9月27日、明治天皇が東幸の途次、当神宮親拝の後、東八丁ひがしはちちょう暇なわて(現 瑞穂区神穂通)で、農民の新穀收穫の様子を御覧になられた。これはその様を描いたもので、中央には鳳輦の中から作業を觀覧になる明治天皇、その前でぬかづくのが岩倉具視、向かって右に控えるのが尾張徳川家当主と家臣たちである。現在ではさほど目にする事のなくなった稲刈りの作業風景、農機具を詳細に描いている。

その他の主な展示品

◎重文 ○県文

《書跡・古文書》 ◎法華経涌出品 ○般若心経 ○寛永十三年熱田万句 徳川家慶知行朱印状 他

《絵画》 年中行事片々(神宝虫干) -石川英鳳筆- 人長舞図 -沢宜嘉筆- 村雨図 両槐門図 他

《工芸》 木造舞楽面 二の舞(咲・腫) 舞楽面 蘇利古 蓬菜鏡 御正体鏡 他

《刀剣》 ○劍無銘(俱利伽羅劍) ○脇指無銘(号あざ丸) 太刀銘兼吉 刀銘若狭守氏房作 他

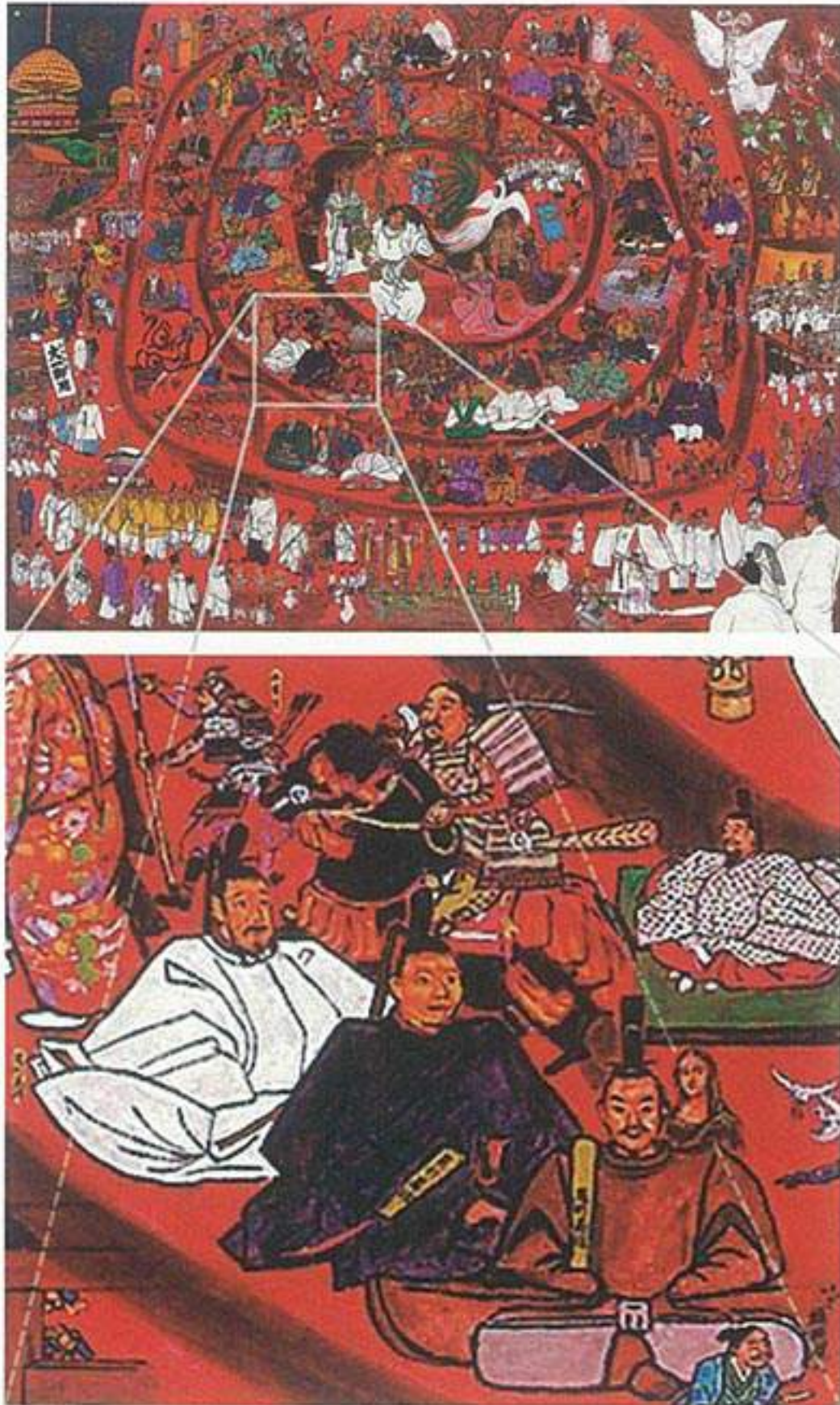
《コーナー展示 — 熱田神宮の歴史と文化財Ⅱ —》 ◎彩繪桧扇 ◎錦包挿鞋 ○熱田神宮古絵図(残闕)

○勸進沙門清徳熱田大明神修造勸進状 孝明天皇繪旨 日本武尊像 宮簀媛命像 弟橘媛命像 他

—展示品より—

熱田神宮にまつわる神々と偉人たち(その8) ～足利將軍家と熱田～ と、吾朗さん。

「熱田神宮 創祀千九百年」 斎藤吾朗筆



今回は平景清と当神宮にまつわる伝説についてお話しをさせて頂きました。今号は足利將軍家と当神宮のかかわりをご紹介します。

下段の写真中央上段で太刀を肩にかけ、手綱をさばく人物の構図の原本は日本史の教科書などで多くの方々をご覧になられていることと思います。最近では高師直像ではないかという説もありますが、長らく「足利尊氏」⁽¹³³⁵⁾として親しまれた肖像画です。尊氏は建武2年、後醍醐天皇より尊氏追討の宣旨を受けた新田義貞を、箱根・竹の下の戦いで破り、その勢威を維持し翌3年正月11日に入京を果たすのですが、その道すがら12月25日に尊氏は当神宮の権宮司、尾張仲衡に宛てて、祈禱を依頼した書状を送っています。

また、尊氏の下に描かれる垂纒を著けた3人の人物は向かって左より、足利義持(四代)・義政(八代)・義植(十代)です。彼らが將軍在職時に当神宮は大規模な造営事業を行っています。特に義政は造営に併せ、当神宮の御祭神のために御装束・神宝類も寄進し、それが現在では「古神宝類」という名称で、44点もの宝物が重要文化財に指定されています。

ところで、十代將軍義植の左肩に髪を長い黒い服を着た女性が描かれているのが気になりませんか？これは、レオナルド・ダ・ヴィンチが描いた「モナ・リザ」です。

実は本画を描いた斎藤吾朗氏は、「モナ・リザ」をルーヴル美術館の公認で模写を行った世界で2人の内の1人なのです。因みにもう1人はマルク・シャガールです。折角ですので、今号は本画を描いた斎藤吾朗氏の紹介もさせて頂きます。吾朗氏は昭和22年西尾市に生まれ、多摩美術大学大学院を卒業、母校である愛知県立西尾高校で美術教員として教壇に立ちました。生徒と壁を作らぬ教育活動に生徒は大喜びなのですが、それを良かれと思わない同僚もおり、悩んだ末に職を辞し、ヨーロッパ・アフリカへ赴いて、絵の修行をします。やがて、懐も尽きそうになった頃、自身の成果を母に見せようと考えた吾朗氏は、美術には不得手な母でも「モナ・リザ」ならば判るかも知れない…と思いつき、「モナ・リザ」を模写することを決意したようです。そして「モナ・リザ」の模写をルーヴル美術館の職員に懇願し、断られ続けても足繁く同館に赴き、ついに同館の職員も吾朗氏の熱意と技量を認め、模写の許可が与えられたといわれています。無事、「モナ・リザ」の模写を終えた吾朗氏、パリから日本に帰る飛行機の窓からキレイな夕焼けをみて、赤色の素晴らしさや、地元・西尾の赤土を思い、赤絵をライフワークとし、「斎藤の赤絵」は吾朗氏の冠言葉となりました。そして、鑑賞者を唸らせたり、思わず「ニヤリ」とさせる風刺的な作風も見ものです。また近年では、本画のように「モナ・リザ」を描き込む作品も数多く制作しています。「モナ・リザ」の作者であるダ・ヴィンチは、15世紀末辺りの人物なので、本画ではこの場所に描かれています。

他館で吾朗氏の赤絵を見る機会があれば、是非、作品の意図と、「モナ・リザ」を探してみてください。(以下次号)